

《研究ノート》

スポーツ文化財としての オリンピック関連資料の収集について 第一報 — 1912年、1940年、及び1964年夏季オリンピックに関する収集品—

Initial Report on Olympic memorabilia, constituting sports cultural assets, relating to the 1912, 1940 and 1964 Summer Olympic Games

藤 瀬 武 彦*

Abstract

The author has presented part of a collection of Olympic memorabilia which he started in around 1984, about 35 years ago. The initial report includes a photograph collection from the fifth modern Olympic Games held in Stockholm in 1912, which were also the first Olympics in which Japan participated, and a ticket for the marathon featuring Shiso Kanakuri; the bidding album for the twelfth Summer Olympics which were due to be held in Tokyo in 1940 but were cancelled because of the Sino-Japanese war; the album (from the 1949 National Amateur Athletic Union Swimming Championship) was sent to Masaji Tabata (at that time head of the Japanese Swimming Federation) by Fred Isamu Wada, who did the bidding activities at his own expense for the eighteenth Tokyo Summer Olympics, the first Olympics held in Asia in 1964; autographed paper from the Japanese Athletics Team celebrating Kokichi Tsuburaya's winning of the bronze medal in the marathon; identity cards of players and officials, etc. These memorabilia should be collected, preserved and displayed in a sports museum as sports cultural assets.

Keywords: Olympics, memorabilia, collection, sports cultural assets, sports museum

1. はじめに

1) 日本のオリンピックとの主な関わり (1964年東京オリンピックまで)

日本がオリンピックに初めて参加したのは1912年(明治45年)の第5回ストックホルム大会であり、日本選手団は嘉納治五郎団長、大森兵蔵監督、三島彌彦と金栗四三選手の4名であった。このときの競技成績は、三島が100mと200m一次予選敗退、400m準決勝棄権(予選は出場が

* Takehiko Fujise

新潟国際情報大学経営情報学部経営学科
〒950-2292 新潟市西区みずき野 3-1-1

Department of Business Administration, Faculty of Business and Informatics, Niigata University of International and Information Studies, 3-1-1 Mizukino, Nishi-Ku, Niigata City 950-2292

2名だったために通過)、金栗が途中棄権(公式記録上は棄権の意思が大会運営側に示されていなかったために行方不明となっていた)と散々であった。しかし、この大会に参加するために嘉納の苦労や選手の経済的負担などが大変であったことを乗り越えて参加したことが、日本の競技スポーツが史上初めて国際大会に出場した意義あるものとなった。

その後、1928年(昭和3年)の第9回アムステルダム大会で織田幹雄選手が陸上三段跳びで日本人初の金メダルを獲得して以来、1932年のロサンゼルス大会や1936年のベルリン大会でも日本選手は大活躍した。そういうなかで1930年に永田秀次郎東京市長が1940年第12回東京オリンピックの招致活動を始めた。この大会を決めるIOC(International Olympic Committee: 国際オリンピック委員会)総会はベルリン大会直前の7月に行われ、IOCの杉村陽太郎や副島道正委員などの尽力によって東京オリンピック招致に成功した(東京36票、ヘルシンキ27票)。しかし、1937年7月7日の盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が始まり、1938年7月14日に東京オリンピックを所管する厚生省の木戸幸一大臣がオリンピック返上を発表した。

第2次世界大戦後の1948年(昭和23年)の第14回ロンドン大会には敗戦国であった日本は招待されなかったため、日本水泳連盟は同年の日本水泳選手権を神宮プールで同日同時間に開催して、オリンピックの優勝記録を上回る世界新記録を連発した。翌1949年6月に国際水連に復帰した日本水連は全米水泳選手権に出場する機会を得たが、当時は反日感情が強く残るアメリカで日本選手のための宿泊所を確保することは難しかった。しかし、ロサンゼルス在住の日系二世の和田勇氏が自宅を8月13日から21日までの9日間にわたり日本選手団8名のために無償提供し、献身的に食事などの世話をした。そして、大会は古橋廣之進ら選手の大活躍で自由形6種目中5種目に優勝し、9つの世界新記録を樹立した。その後、1951年に和田夫妻が日本水連に招待されて訪日したときに、田畑政治水連会長は「東京でオリンピックを開催するのが私の夢です」と話しており、1958年に再来日した和田氏に対して田畑と東龍太郎体協会長が「オリンピックを東京に招致したいのでご協力をお願いしたい」と申し出たときに、和田氏は「喜んで中南米を回って各国のIOC委員を説得してきます」と答えている。和田夫妻は1959年3月にロサンゼルスからメキシコへ飛び立ち、私財を擲った中南米行脚が始まった。彼らの訪問国はキューバやブラジルなど10か国11都市にわたった。そして、1959年5月26日のミュンヘンIOC総会での投票で58票中34票を獲得して1964年の第18回東京オリンピック開催を勝ち取った。大会自体は10月10日(開会式)から10月24日(閉会式)まで15日間開催され、日本選手団は16個の金メダル、5個の銀メダル、8個の銅メダルを獲得して過去最高の成績を残した。

2) オリンピック関連資料の収集と展示について

著者は1984年(昭和59年)頃から東京都内の古書店などに度々通い、また2000年頃からはネットオークションをも利用して、さらには体育スポーツ関係者や元オリンピック選手から直接寄贈されるなどしてオリンピック関連資料を今日まで約35年間にわたり収集してきた。現在までの収集品数は正確には把握していないが数え方によっては1万点を遙かに超えるものと思われるが、過去にこれらの一部を展示する機会があった。新潟国際情報大学の国際交流委員会は、2010年(平成22年)10月23日の学園祭で1984年ロサンゼルスと1988年ソウルオリンピックのレスリングで銀メダルを獲得した太田章氏を講師に迎え、「スポーツによる国際交流と平和の祭典オリンピックについて」というテーマで国際理解講演会を開催した。その前後2週間にわたって、参加メダル、ブレザー、トーチなど約50点のオリンピック関連資料の展示を行った(写真1)。

また 2012 年 4 月 2 日から 7 月 31 日まで国際交流センター企画展として日本のオリンピック参加 100 年を記念して「平和と友好の祭典 オリンピック」をテーマとしたオリンピック関連資料約 70 点（1912 年ストックホルム大会や 1964 年東京大会の関連資料など）の展示を行った（写真 2）。これらの展示品の一部は、オリンピックに陸上競技選手として 3 回、コーチ・監督として 2 回出場された大串啓二氏（後述）から著者に寄贈されたものであった。

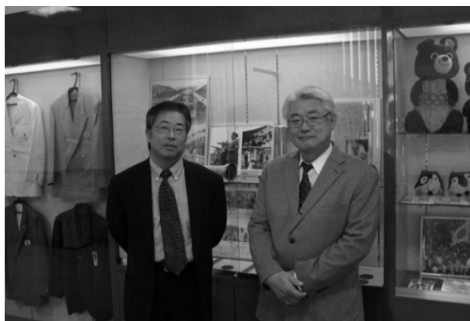


写真 1 (左). 2010 年度国際理解講演会の講師の太田章氏 (右) と著者 (左) が国際交流センター入口の展示の前で。



写真 2 (右). 2012 年度国際交流センター企画展での展示の前で大串啓二氏 (右) と著者 (左)。

一方、オリンピックを始めとした国際スポーツ大会や国内の主要な競技会などのスポーツ関連資料を収集し、また展示保存している日本の総合スポーツ博物館は、国立霞ヶ丘競技場（通称国立競技場）内に設置されていた「秩父宮記念スポーツ博物館」であったが、現在は新国立競技場建設のために解体されており 2013 年 5 月 7 日から現在に至るまで休館となっている。当初は新競技場内に移転される予定であったが、総工事費用の大幅な削減による整備計画の見直しで白紙撤回となり、現在は東京都足立区綾瀬の物流収蔵庫に資料が保管されたままになっている。同博物館の今後の運営については、日本体育学会関連のシンポジウムなどで度々議論されているところである。また、戦前から戦後にかけて個人収集家として有名であった田尾栄一氏のスポーツ資料約 1 万 5 千点のうち約 9 割近くが散逸して確認できていないという報告もなされている。

本来、貴重なスポーツ関連資料は、学芸員や司書などの専門職員が配置されている専門の施設で収集、保存、展示あるいは研究に使用されるべきであるが、残念ながら欧米とは異なり日本にはそういう環境がほとんどないのが現状である。著者自身の収集品もとりあえず個人的に保管しておき、前述のように機会があれば公開していきたいと考えている。そこで本研究では、日本が初めて参加した 1912 年のストックホルム大会、戦争のために返上・中止となった 1940 年の東京大会、アジアで最初に開催された 1964 年の東京大会などに関するオリンピック関連資料を紹介することにした。

2. 収集品と解説

1) 1896 年第 1 回 アテネオリンピックの参加記念メダル (1896 Athens Bronze Commemoration Medal)

まずは 1896 年（明治 29 年）に復興された第 1 回大会であるアテネオリンピックの資料について紹介する。写真 3 と 4 に示した参加メダル^(注1)は、第 1 回アテネオリンピックの記念品として

一般に広く流通させるために大量に鑄造されている。表の図柄は、アクロポリス（都市国家）を背景にして、不死鳥に乗って右手に月桂冠を持ったアテーナー女神（アテネ市の守護女神）が炎から飛び立っているところである（写真3）。裏の図柄は、月桂冠の中に5つのギリシャ語の説明文の上に星が置かれている（写真4）。

オリンピックでは全ての大会においてそれぞれの参加メダルが存在するが、通常は大会関係者や選手などに参加記念メダルとしてわたされるものである。第1回アテネオリンピックの場合は開催前に財政がかなり困窮していたため、ギリシャの大実業家のジョルジュ・アペロフ氏からスタジアム再建費用を寄付してもらったり、12種類のオリンピック記念切手を発行したり、またかなり高額の入場券を前払い制にするなどして大会運営費を捻出している。この参加メダルについても、おそらく利益を出すために大量（選手数245名^{（注2）}に対して2万個）に鑄造して一般に販売されたものと思われる。例えば、1920年第7回アントワープ大会では、選手が2,669名に対して参加メダル数が6,000個作成されて選手や役員にわたされており、その後のオリンピックにおける選手・役員数と参加メダル数の比率から考えても、そのことが窺える。



写真3（左）. 第1回アテネオリンピックの参加メダルの表.

ギリシャ語は「オリンピック 競技会 紀元前 776 年 1896 年 アテネ」.

写真4（右）. 参加メダルの裏のギリシャ語は「国際 オリンピック 競技会 於アテネ 1896 年」. サイズは直径 50mm, 厚さ 4mm, 重さ 58g である.

2) 1912 年第 5 回ストックホルムオリンピック（日本初参加）に関する収集体

(1) 第 5 回オリンピック写真集「写真と文字で綴る第 5 回オリンピック」（オーレン&オーケルンズ出版社、イエテボリ）

この写真集（写真5）に示されている目次の内容（写真6）は、「パート4及び5に含まれる内容：サッカー、射撃、及び屋外テニス」「パート6：自転車競技」「パート7：陸上競技：100、800、1500、5000 及び 10000m」「パート8：体操と綱引き」「パート9：マラソン」「パート10：レスリング」「パート11：投擲（砲丸投げ、円盤投げ、ハンマー投げ、やり投げ）」「パート12：第2回公開スウェーデン歌フェスティバル」「パート13：陸上競技：200、400m、ハードル、団体、リレー及びクロスカントリー」「パート14：跳躍（走り・立ち幅跳び、三段跳び、立ち・棒高跳び）」「パート15：五種競技、十種競技及び競歩」「パート16：水泳」「パート17：フェンシング」「パート18 及び 19：馬術」「パート20：ボート」「パート21：オリンピックゲーム開催中のストックホルム」「パート22：セーリング」「パート23：オリンピックゲームの航空週間」及び「パート24：オリンピックゲーム総評」である。各々において10数枚の写真と解説で構成されている（パート1から24まで全384ページ）。

ストックホルムオリンピックのメイン競技場である「ストックホルム・スタディオン」は、オリンピック開催年の1912年6月1日に完成した。この競技場はレンガ造りで当時はトラック1周が380.33mであったが、現在は400mとなって陸上競技場として使用されている。「パート9：マラソン」の写真8（スタート直後）と入場券裏側のスタジアム図（写真10）から、マラソンは観客席入場口EとBの間にある貴賓席前からスタートしてトラックを1周と約300m走り、競技場出入口からヴェルハラ通りへ走り出たものと思われる。この写真8からは金栗選手の姿は確認できないが、1990年9月30日に日本テレビで放送された番組「知ってるつもり?! - 幻のマラソン王伝説 -」の中で出場者68名中後ろから5番目に競技場を出ていく金栗選手の姿が映されていた。



写真5（左）. 写真集のカバー表紙（縦24cm, 横30.5cm, 厚さ3.5cm）.

写真6（右）. 写真集の目次（詳細は本文中）.

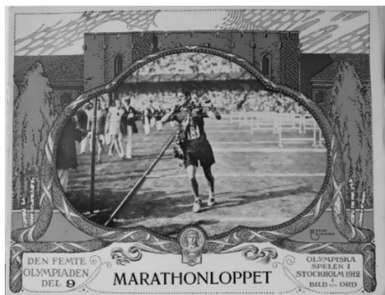


写真7・8. 写真集のパート9（マラソン）の表紙（左：マラソン優勝者の南アフリカのケネス・マッカーサー選手）とマラソンのスタート直後（右）.

(2) 1912年7月14日入場券（金栗選手が出場したマラソン実施日）

1912年第5回ストックホルム大会の実質的期間は7月6日の開会式から7月22日までであり^(注3)、金栗選手の出場したマラソンは7月14日に実施された。この入場券の金額は15クローネであり、大会当時の金栗選手の1か月の部屋代が75クローネ（1泊2.5クローネ）といわれていることから、この金額と比較すると非常に高価（6泊分に相当）であったことが窺える。ちなみに開会式入場券は25クローネ、水泳入場券は5クローネであった。

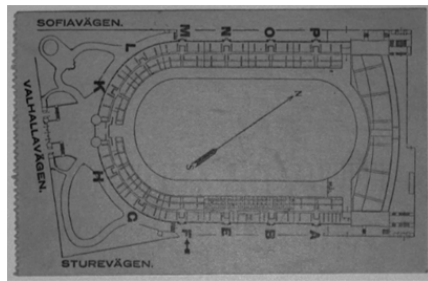


写真 9 (左). ストックホルムオリンピック・スタジアム入場券の表 (縦 7.4cm, 横 11.5cm). スウェーデン語は「V. オリンピアード 1912 年ストックホルムオリンピック オリンピック開催のスタジアム入場チケット 1912 年 7 月 14 日 日曜日 スチューレ通り側入場口 F 左側上部 ベンチ番号 1 番 座席番号 31 番 料金 15 クロネ」.

写真 10 (右). ストックホルムオリンピック・スタジアム入場券 (裏). スウェーデン語は「ソフィア通り (左上文字), ヴェルハラ通り (左文字), スチューレ通り (左下文字)」.

3) 1940 年第 12 回東京オリンピック (日中戦争のために返上) 招致アルバム

このアルバムに関しては、招致活動のときに日本に対する理解を深めてもらうために、東京市 (当時) が IOC 委員用にこのアルバムを 60 部程度作成したということが 1996 年 5 月 22 日の朝日新聞夕刊に掲載されている。写真 11 のように、このアルバムは横長の B4 判で、表紙が東京の高級織物「江戸錦」を張った豪華版である。まず表紙をめくると「SCENIC JAPAN」の文字と日本国旗が、次に毛筆体で「日本」と「TOKYO MUNICIPAL OFFICE 1935」の文字が、次のページが五輪マークの下に「INVITATION」と「TO THE IOC GENTLEMEN」で始まる英文の文章が記述されて、最後に牛塚虎太郎東京市長の印刷の毛筆による自署 (Torataro Ushizuka) が記され、次に「FOREWORD」が英文で 16 行記述されている。そして、この後に 1 ページめくると (左ページが英題、右ページが写真) に 1 枚の写真 (最初は「Feudal Castle and Cherry Blossoms, Hirosaki」) が貼られており、日本の名所、行事、四季の風景、あるいは明治神宮外苑競技場、競技会、武道などのオリジナルプリントが合計 50 枚収められている。東京市が当時 1 部 32 円をかけて日本紹介の写真集『日本』を 60 余部作り、各国 IOC 委員らに送達したという。1935 年当時、米 1 升 (1.5kg) が約 35 銭 (10kg は 2 円 33 銭) だとすると、米 137kg 分 (現在の 10kg 3,000 円で換算すると約 41,200 円) に相当し、非常に高価であったことが窺える。



写真 11 (左). 第 12 回東京オリンピック招致アルバムの表紙.

写真 12 (右). 東京のスポーツ施設の写真 (明治神宮外苑の空撮: 左上の施設が明治神宮競技場であり、現在は新国立競技場が建設中である).

4) 1964 年第 18 回東京オリンピック（アジア地域での初開催）に関する収集品

(1) 東京オリンピック招致に尽力した和田勇氏が田畑政治氏に寄贈したアルバム（1949 年全米水泳選手権大会に日本水泳チームが参加した時の記念写真集）

このアルバム（写真 13）は、表紙右下（写真 14）の英文字「Mr Masaji Tabata from Isamu Wada August 1949」から、おそらく和田勇氏から日本水泳連盟会長であった田畑政治氏に個人的に贈られた 1949 年の全米水泳選手権の記念写真集であったのではないと思われる。その内容は 44 ページにわたり 87 枚の写真が貼られている。最初のページは日本選手団のロサンゼルス到着の写真（写真 15）から始まり、4 ページから和田勇邸宅の写真（写真 16）や歓迎会の写真が、10 から 14 ページまでが選手の個人写真や複数人の写真が、15 から 38 ページまでが大会会場、大会実況、表彰式の写真が、39 から 44 ページまでが送別会や帰国時のイングルウッド空港での写真が貼られている。

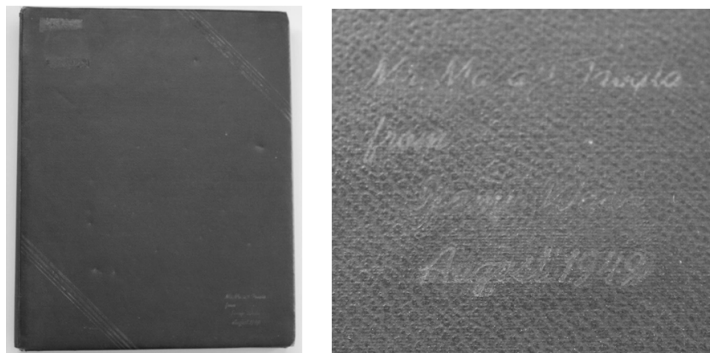


写真 13・14. アルバム（縦 32.8cm, 横 26cm, 厚さ 3.8cm）の表紙（左）と表紙右下の拡大像（Mr Masaji Tabata from Isamu Wada August 1949）。



写真 15 (左). 日本水泳選手団のロサンゼルス到着。前列左から田中純夫、丸山茂幸、村上勝芳（トレーナー）、後列左から松本滝蔵（団長）、村山修一（主将）、古橋廣之進、橋爪四郎、浜口喜博の諸氏。
写真 16 (右). ロサンゼルス市の自宅で和田勇氏（当時 41 歳）と妻の正子氏（当時 35 歳）。

(2) 陸上競技の銅メダルと円谷幸吉選手ら陸上競技選手団のサイン寄書色紙

陸上競技 (ATHLETICS) 3 位入賞の銅メダルは、直径 63mm、厚さ 5mm、重さ 102g の青銅製のメダルである。夏季オリンピックの金、銀、銅の賞メダルは、表の図柄 (写真 17) がスタジアムを背景にヤシの枝を持った勝利者が歓喜に酔った競技者に運ばれるところであり、裏の図柄 (写真 18) がコロッセウム (ローマの円形闘技場) を背景に勝利の女神が月桂冠とヤシの枝を持っているところであり、1928 年のアムステルダム大会から 2000 年のシドニー大会までこの図柄に統一されていた。

円谷選手は東京オリンピックの陸上競技最終日 (1964 年 10 月 21 日) に行われたマラソンで、それまで大会のメイン会場である国立競技場のポールに日の丸を掲げていなかった陸上選手団の念願であった銅メダル獲得を成し遂げた。当日の記者団の質問には「4 年後のメキシコオリンピックを目指します。」と答えている。しかし、その後 1966 年に婚約が上司に反対されて破綻したうえに、その上司を説得しようとした畠野洋夫コーチが左遷されたこと、持病の腰痛 (椎間板ヘルニア) やアキレス腱痛が悪化してきたこと、そして思うように練習ができない状況で国内外のライバルたちが好成績を上げていったところに、テレビ番組 (テーマは「メキシコで日の丸を」) のカメラ取材を受けている (1967 年 12 月 19 日)。そして、1968 年 1 月 8 日に「・・・父上様母上様、幸吉は、もうすっかり疲れ切ってしまって走れません。・・・」という遺書を残して職場である自衛隊体育学校朝霞駐屯地の自室で自殺した^(註4)。つまり、円谷選手は「メキシコでは銅メダル以上の成績をとる」という世間との約束が果たせなくなり、強い責任感から自ら命を絶ったのである。戦前のオリンピックから今日に至るまでずっと大会前にマスコミ等が過度に「メダル、メダル」と国民を煽って選手に強いプレッシャーを与えるような行為が続いているように感じられるが、競技を観る側も観戦・応援マナーを身に付けて今後のオリンピックではそういう行為を極力止めるべきである。



写真 17・18・19. 円谷幸吉選手がマラソンで獲得したものと同型の銅メダルの表 (左) と裏 (中: 競技名 (ATHLETICS) が記載), 並びに円谷選手を中心に男子陸上競技チームのサイン寄書色紙 (右). サインは円谷選手の左斜め下が吉岡隆徳氏 (依田郁子と飯島秀雄選手のコーチ), 円谷選手の真下の大串啓二氏 (400mH) から左回りに山口東一 (1500m), 奥沢善二 (3000SC), 安田寛一 (110mH), 斎辰雄 (元五輪陸上選手), 盛田久生 (棒高跳), 三木孝志 (やり投), 畠野洋夫 (円谷コーチ), 依田郁子 (80mH), 糸川照雄 (砲丸投), 鳥居義正 (棒高跳), 浅井 浄 (400mR), 田中 章 (110mH), 岡崎高之 (三段跳), 室洋二郎 (400mR), 織田幹雄 (総監督), 高柳 慧 (走幅跳) の諸氏。

(3) 大串啓二選手及び競技役員の身分証明書

大串選手は佐賀県白石町出身の陸上 400m ハードルの名選手(日本選手権 6 回優勝(400mH4 回、400m2 回)、国体 9 連覇)であった。1956 年第 16 回メルボルン大会(400mH、4 × 400mR(第 2 走))、1960 年第 17 回ローマ大会(400mH、4 × 100mR(第 1 走))、1964 年第 18 回東京大会(400mH: 陸上選手団の主将)に選手として出場し、また 1988 年第 24 回ソウル大会で陸上コーチとして、1992 年第 25 回バルセロナ大会で陸上監督として、合計 5 回のオリンピックに出場している。

組織委員会から発行された身分証明書(ID カード)は、カード番号と同じ番号を印刷したビニールケースに入れるようになっている(写真 20～25)。これは 7 種類存在し、「A(白色)」は保持者が IOC メンバー、「B(緑色)」は IF(国際競技連盟)と NOC(各国オリンピック委員会)の会長、事務局長とその家族、「C(茶色)」は選手団長、アタッシュ、NOC 委員とそのゲスト、「D(黄色)」は IF ジュリー、レフリー、ジャッジ、「E(赤色)」は報道関係者、「F(青色)」は選手と選手団役員、「G(紫色)」は組織委員会ゲストであった。

このカードの提示によって、主競技場や会場の指定された区分への出入り、選手村への出入りが可能であった。大串選手の ID カードには、赤色で「陸上競技」のスタンプが押されているので国立競技場への入場資格者であることが分かる。この他の便宜供与としては、出入国時の簡易通関(外国選手)、組織委員会を用意した輸送機関の自由乗車、博物館や美術館等への無料入場、東京周辺の国有鉄道、私営鉄道、都営電車・バス、及び私営地下鉄・バス等の交通機関の無料乗車が可能であった。

また、これらとは別に写真 26 から 35 に示した日本の各競技団体から発行された競技役員用の ID カードが存在し、写真 27 に示した同じビニールケースに出入会場が記載された ID カードを入れるものである。

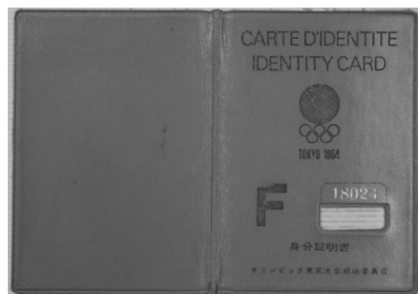
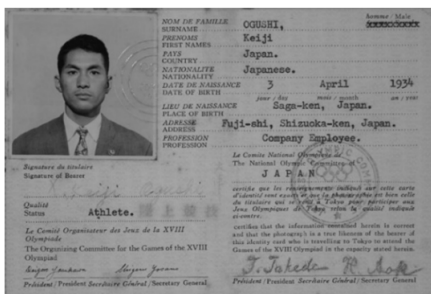


写真 20・21. 大串啓二選手(掲載承諾済)の ID カード(左)とビニール製ケース(右)。



写真 22. 1964 年東京オリンピック日本陸上選手団の集合写真（大串啓二氏より寄贈）。前列右から田島直人（ヘッドコーチ：1936 年ベルリン大会三段跳び金メダル）、織田幹雄（総監督：1928 年アムステルダム大会三段跳び金メダル）、大串啓二（主将）、円谷幸吉（マラソン銅メダル）の諸氏。

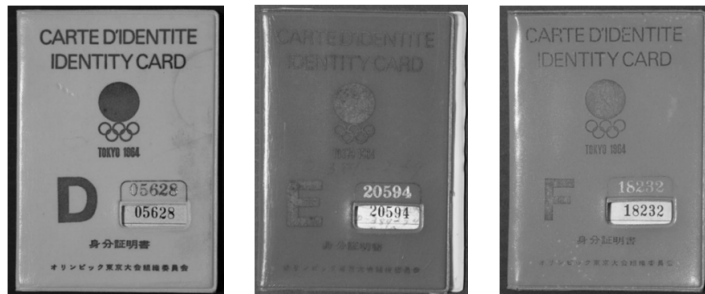


写真 23・24・25. 体操審判（左）、報道関係者（中）、球技種目選手（右）の ID カード（開いた状態：縦 10.5cm×横 15.4cm）が入っているケース（閉じた状態：縦 11.4cm×横 8.2cm）。



写真 26・27. 日本の競技団体から日本の競技役員に発行された身分証明書（開いた状態の裏側：縦 10.6cm×横 15.5cm）とケース（閉じた状態：縦 11.2cm×横 8.0cm）。

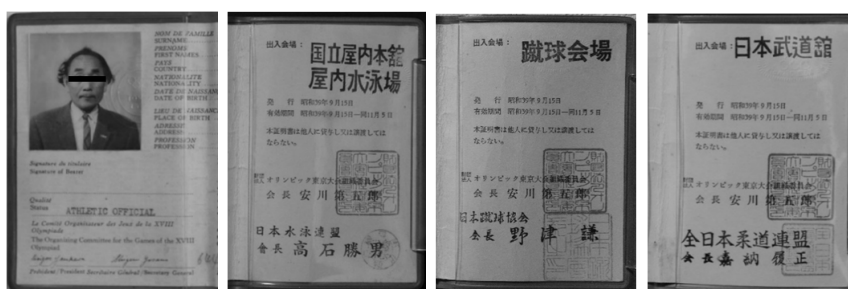


写真 28・29・30・31. 左から陸上競技^(注5)、水泳、サッカー、柔道における日本の競技役員の身分証明書。

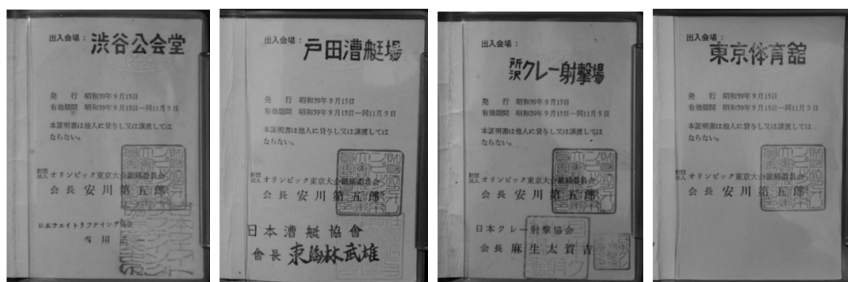


写真 32・33・34・35. 左から重量挙げ、ボート、射撃、体操における日本の競技役員の身分証明書。

3. おわりに

日本がオリンピックに参加してから 100 年以上が経過し、また 2020 年の東京オリンピック開催が迫ってきている今日においては、スポーツに関する貴重な資料を収集し、また保存や展示する専用の施設はもちろんのこと、そのシステムをつくることが重要になってきている。2003 年(平成 15 年)に発行された「スポーツ博物館&資料館 ネットワーク報告書」によれば、この当時にすでに 70 近くのスポーツ関連博物館が存在しているが、そのほとんどが単体で運営されて有効に機能していないことから、スポーツ関係者や研究者あるいは施設運営者など活動を活性化するためにネットワーク構築が始まった。しかし、近年になって国内にはスポーツ関連博物館が 230 近くに増加してきているものの、その中心的役割を果たすべき施設である「秩父宮記念スポーツ博物館」が休館となっており、それらの活動が有効に拡大されてきているようには思えない。

一方、近年のネットオークションではときには非常に貴重なオリンピック関連資料が売買されている実態があるが、選手や役員本人が生前に他者へ贈与したり、また亡くなった後に遺品整理などによって資料が散逸してしまっている可能性が高いように思われる。特に問題と思われる例としては、ネットオークションで出品されるときに個人情報保護との理由から ID カードの写真が剥がされたり、氏名が消されたり、最悪の場合は証明書部分が廃棄されてカードケースのみ出品されることがある。同様にその他の資料においても氏名部分があればそれを削除して出品されることがある。著者はそういう出品者に対しては破損しないように説得を試みてきたが、今回紹介した資料の中には破損・廃棄を免れた ID カードがいくつか存在する。以上のように、施設

やその運営上、収集上の様々な問題点を解決できるような活動やシステムづくりが必要な時期になってきている。

近代オリンピックを復興させたピエール・ド・クーベルタン男爵が提唱したオリンピズム（オリンピックのあるべき姿）とは「スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献する」というものである。そして、オリンピック・ムーブメントとはこのオリンピズムを世界中に広げていく活動のことである。つまり、若者の教育と世界平和に貢献するオリンピック・ムーブメントを推進するためには、スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料を大切に後世へ伝えることが重要であると思われる。

注釈

- (注1) 1896年アテネオリンピックの参加記念メダルには、銅メダルの他に図柄は同じで金メダル (Gilt Bronze) と銀メダル (Silvered Bronze) が少数存在するが、特別な高官や役員に渡されたものと思われる。また、表図柄の女性は Greensfelder らのガイドによると「ニケ (Nike)」となっているが、翼がないことや左手に槍らしきものを持っているのでアテーナー女神とした。
- (注2) オリンピック事典には13ヵ国、311名の選手団が参加したと記載されている。しかし、その数に諸説（参加国が14ヵ国、参加人数が241名、245名、あるいは285名など）あるのは、佐山も著書の中で述べているように、大会エントリーが国毎ではなく個人であったこと、アマチュアであるか否かの判断が不明確であったことによるものと思われる。
- (注3) 公式報告書によれば、ストックホルム大会の競技はテニスが5月5日から12日までと6月28日に、サッカーと射撃が6月29日から7月5日まで、またヨットが7月21日と22日に実施されているが、最後の7月27日には「Presentation of Yachting Prizes」が行われているのみなので実質競技は7月22日で終了している。開会式は7月6日に実施されているが（他の競技は全て7月6日以降に実施）、閉会式は各競技団体で送別会などが実施されており、全体では行われていない。なお、公式ポスターには会期を6月29日から7月22日と記載されているが、通常大会期間は開会式から閉会式までをいう。
- (注4) 円谷選手の自殺が発見されたのは1968年1月9日午前11時頃とのことであるが（多くが1月9日死亡となっている）、7日の夜から自殺発見まで自室の鍵がかけられていてその姿が確認されておらず、検視の結果は右頸動脈切断による失血死で死後30数時間経過しているとのことから死亡推定時刻は7日夜から8日未明にかけてとなっている（長岡の著書では1月8日午前1時頃と推定）。従って、1月7日夜に死亡との見解もあるが、2019年1月8日のNHK ニュースウォッチナインでは円谷選手の命日ということで特集を放送していたことから、本稿でも死亡日を1月8日とした。
- (注5) 元の持ち主のT氏は陸上競技のプログラムに「関係者」として氏名が掲載されているので、おそらく本来は日本の陸上競技連盟から発行される身分証明書（日本語表記）をわたされるはずであったが、なぜか組織委員会が発行するIDカード（英語・仏語表記）が日本の競技団体から役員に渡される身分証明書ケースに入っていた。この理由は不明である。なお、写真28は右側に個人情報があるために写真貼付されている右側部分を示した。

参考文献

- ・ 青山一郎. 栄光と孤独の彼方へ円谷幸吉物語. ベースボール・マガジン社, 東京:1980 年.
- ・ 朝日新聞社. 1940 年幻の東京五輪招致アルバム 世田谷の男性発見「平和」強調の豪華版. 朝日新聞夕刊, 1996 年 (平成 8 年) 5 月 22 日.
- ・ ベースボール・マガジン社編. 人間 田畑政治. ベースボール・マガジン社, 東京:1985 年.
- ・ 後藤健生. 国立競技場の 100 年－明治神宮外苑から見る日本の近代スポーツ－. ミネルヴァ書房, 京都:2013 年.
- ・ Greensfelder, J., Vorontsov, O., and Lally, J. OLYMPIC MEDALS A REFERENCE GUIDE. GVL Enterprises, OH, USA: 1998.
- ・ 橋本克彦. オリンピックに奪われた命－円谷幸吉、三十年目の新証言－. 小学館文庫, 東京:1999 年.
- ・ 橋本一夫. 幻の東京オリンピック 1940 年大会招致から返上まで. 日本放送出版協会, 東京:1993 年.
- ・ 石堂典秀, 大友昌子, 木村華織, 来田享子. 知の饗宴としてのオリンピック. エイデル研究所, 東京:2016 年.
- ・ ジム・パリー, ヴァシル・ギルギノフ著, 舩本直文訳・著. オリンピックのすべて 古代の理想から現代の諸問題まで. 大修館書店, 東京:2008 年.
- ・ 長岡民男. もう走れません 円谷幸吉の栄光と死. 講談社, 東京:1977 年.
- ・ 日本オリンピック委員会. オリンピック事典. 日本オリンピック委員会監修, 日本オリンピック・アカデミー編, プレス ギムナスチカ, 東京:1981 年.
- ・ 日本オリンピック・アカデミー. オリンピック・ムーブメント研究班. オリンピックを知ろう! 21 世紀オリンピック豆事典. 株式会社 楽, 東京:2004 年.
- ・ 日本オリンピック委員会. 近代オリンピック 100 年の歩み. ベースボール・マガジン社, 東京:1994 年.
- ・ 日本オリンピック委員会ホームページ. オリンピズム:クーベルタンとオリンピズム.
<http://www.joc.or.jp/olympism/coubertin/> (2019 年 1 月 8 日閲覧)
- ・ オリンピック東京大会組織委員会. 第十八回オリンピック競技大会公式報告書 上. 共同印刷, 東京:1966 年.
- ・ 及川佑介. スポーツ資料収集家・田尾栄一の資料について. 国士舘大学体育研究所報, 第 31 巻, 83-87, 2012 年.
- ・ 奥野 良. 水連四十年史. 日本水泳連盟, 東京:1969 年.
- ・ 小野清子. スポーツ博物館&記念館 ネットワーク報告書. 日本スポーツ芸術協会, 東京:2003 年.
- ・ 佐山和夫. オリンピックの真実 それはクーベルタンの発案ではなかった. 潮出版社, 東京:2017 年.
- ・ 鈴木 明. 「東京、遂に勝てり!」1936 年ベルリン至急電. 小学館, 東京:1994 年.
- ・ 高杉 良. 東京にオリンピックを呼んだ男. 光文社, 東京:2013 年.
- ・ Swedish Olympic committee. THE OLYMPIC GAMES OF STOCKHOLM 1912 OFFICIAL REPORT. Stockholm, December 1913.
- ・ 武田 薫. マラソンと日本人. 朝日新聞出版, 東京:2014 年.
- ・ 読売新聞社編. 戦後スポーツ あの場面 あの記録. 読売新聞社, 東京:1996 年.

